（別紙様式６）
(Attached Form 6)

学位論文の要旨（論文の内容の要旨）
Summary of the Dissertation (Summary of Dissertation Contents)

論　文　題　目
Dissertation title

広島大学大学院国際協力研究科
Graduate School for International Development and Cooperation, Hiroshima University
博士課程後期　教育文化専攻
Doctoral Program　Division of Educational Development and Cultural and Regional Studies
学生番号　D106625
Student ID No.
氏　名　李　賢正　□
Name　Seal

日本と韓国は歴史的に漢語を使った時期が長く1000年以上になる。それだけに外来語という意識はないと言ってもいいほど一般の言語生活に溶け込んでいる。また、最後に受け入れるようになったのは両国ともに英語である。ただし、英語の受容と使用は日本の方が韓国より時期的に早かった。では、21世紀の現在の外来語使用の様相はどうだろうか。今日はいわゆる国際化、情報化、グロバール化時代である。その表現からも分かるようにある情報や知識、または文物における国同士の境界はもうすでになくなっている。あふれ出る文物とともに新しい語がたくさん造られたり、借用されたりしている。その結果、外来語の使用が多くなっていると感じるのは当然のことであろう。日本でも韓国でもそのような外来語の使用に対する懸念の声がある。このような背景から本研究では今日の日本語と韓国語の中ではたして外来語はどのように使われているのかについて把握してみた。新しく語を造るプロセスから外来語の使用が分かるのではないかという判断から、2001年から2010年までの新語を対象にして21世紀初頭の日本語と韓国語における新語の特徴を語種の観点から把握した。新語を対象にした理由は現代語の語彙の一側面や語がどのように作られているかを見るための対象資料としては新語がふさわしいという判断からである。新語の中でも特に外来語の位置と特徴を探り、語を造る際に外来語がどれだけ関与しているのかということについて把握することを目的とした。

本論文は7章で構成されており、第1章では研究の背景及び目的を、第2章では先行研究の検討から得られた課題と本研究の意義を述べた。第3章では本研究の調査資料と対象及び調査単位などについて述べた。

第4章から第5章にかけては21世紀初頭の言葉に現れる特徴とその中での外来語の位置を把握するため、新語を対象にして語種の観点から分析を行った。第4章では日本語と韓国語の新語における語種構成の特徴をより明らかにするため、新語の語種構成とともに語彙全般の語種構成について述べた。また、語彙全般との比較を通して語種構成において新語と語彙全般には差があるかどうかを把握し、両言語の新語における語種構成にはどのような特徴があるのかをまとめた。第5章では両言語における新語としての混種語に的を絞り、混種語を造る際の造語成分としての各語種の位置と特徴を把握するため2種類の分析を行った。その一つは混種語を成している造語成分の語種構成であり、もう一つは混種語の造語パターンにおける造語成分別各語種の位置の分析であった。それらを通して特に21世紀初頭における外来語の位置についてまとめた。

第6章では第5章での混種語を成している造語成分として実際どのような外来要素がどのように使わ

れているのかをその実例から見た。その時、外来要素の使用頻度と位置の分析を行い、外来要素の使用頻度と位置による外来要素の特徴を探った。

第7章では本研究の総合考察と今後の課題について述べた。

分析の結果、2001年から2010年までの日本語と韓国語の新語は混種語の割合が新語全体の40％台で、語種構成の中で最も高い割合を占めていることが分かった。日本語と韓国語の新語は混種語、漢語、外来語、固有語の順であることが同じであるが、韓国語は日本語に比べて固有語が、日本語は韓国語に比べて外来語が多かった。外来語の新語は両国語ともに20％台を占めており、語彙全般よりは多く使われているが、昔の新語（韓国の『新語辞典』(1946)、日本の『現代用語』(1955)）ほどではなかった。(第4章)

混種語の造語成分の語種の比率を分析した結果、混種語の造語成分として日本語は漢語要素、外来要素、固有要素の順で、その割合の差も明確である反面、韓国語は漢語要素、固有要素、外来要素の順ではあるが、固有要素と外来要素がほぼ同様の割合で使われていることが分かった。また、混種語を成している外来要素の量的な面にも日本語と韓国語に差があることが明らかになった。

また、それらの要素が実際どの位置で使われて混種語を成しているかということについて造語パターンからの分析を行った結果、両言語は漢語要素で始まる語が他の語種で始まる語に比べてその組み合わせが多様であることが分かった。さらに、両言語ともに混種語の後ろの造語成分でよく用いられるのは漢語要素で、漢語の使用率はどの造語成分でも高いことが分かった。

外来要素は両言語ともに漢語要素との結合が多く、特に「外・漢」「漢・外」の組み合わせが多いという類似点があった。一方、日本語では外来要素が後ろまで漢語要素の次の順序を占めながら割合の面でも大きな乱れがないまま用いられている反面、韓国語では造語成分の位置によって固有要素との割合が上になったり下になったりしてその変動が激しいという相違点が見られた。ただし、外来要素も漢語要素ほどではないが、後ろまで用いられていることが分かった。

外来要素は両言語ともに混種語の外来要素が量的にはある程度安定的に使われているが、造語成分別の位置によって外来要素が占めている割合は異なることが分かった。(第5章)

外来要素の使用頻度と位置を分析した結果、日本語も韓国語も混種語における外来要素の位置は大きく第一造語成分と最終造語成分に分かれることが分かった。日本語は外来要素が第一造語成分としても最終造語成分としてもほぼ同様に使われる半面、韓国語は外来要素が最終造語成分よりは第一造語成分として多く使われていることも分かった。

使用頻度からその位置を見ると、日本語は「使用頻度1」の外来要素は最終造語成分よりは第一造語成分として使われるものが多いが、「使用頻度2」から「使用頻度8」までは第一造語成分より最終造語成分として使われるものが多い傾向を見せる。一方、韓国語は「使用頻度１」から「使用頻度6」までは第一造語成分の方が多いか同じであった。また、日本語は「使用頻度9」以上からは複数の位置で用いられるが、韓国語は「使用頻度7」以上から最終造語成分か複数の位置で使われており、日本語とは異なることが分かった。両言語ともに第一造語成分でも最終造語成分でもない成分からは位置と頻度数の関係が見られず、特別な特徴と言えるものはなかった。

複数の位置で現れる外来要素の内、頻度数3以上の差で「前、中、後」のどこで多く使われているかを分析した結果、日本語は「使用頻度10」以上から韓国語は「使用頻度8」以上から第一造語成分として多く使われるか最終造語成分として多く使われるかが分かれた。日本語は使用頻度が高くなるにつれ第一造語成分として多く使われる要素であるか最終造語成分で多く使われる要素であるかが分かるが、韓国語は第一造語成分として使われる外来要素は分かるが、最終造語成分は頻度数が高くても分かりにくかった。

外来要素として新しいものは日本語より韓国語の方に多かったが、両言語ともに「使用頻度１」で、第一造語成分として使われるものが多かった。

日本語と韓国語の混種語の外来要素の中で共通している外来要素は21あったが、それらはすでに定着して使われる要素がほとんどであった。頻度数による差は見られたが、差が大きくても多く使われる位置の差はほとんど見られなかった。(第6章)

以上のような分析結果を踏まえ、研究目的である「語種の観点から見た21世紀現在の言葉の変化」と「現代語における外来語の位置と特徴」と「造語における外来語の関与」に分けて考察してみた。

まず、今までの新語の特徴を外来語の増加であるとしたら21世紀の新語における特徴は外来語よりは混種語の増加であると言える。

つぎに、現代語における外来語は韓国語より日本語の方が量的な位置で優位を占めており、混種語の中で後ろまで使われて、第一造語成分でも最終造語成分でも自由に使われている。このような差が見られるのは日本語と韓国語の中での外来語の定着と関係しており、韓国語よりは日本語の方が外来語が多く定着して使われていると考えられる。また、韓国語の場合は外来語の影響は強いが、その定着度は低いと言えるであろう。

最後に、日本語でも韓国語でも受け入れた外来語を中心に次々と新しい語が造られていること、外来要素を含んでいる混種語が多いこと、1β語の略語、「-er、-ism」と固有要素や漢語要素との組み合わせによる造語などは、外来語の使用が借用の段階を超え、外来語が語を造ることに関与していることを示していると判断される。そして、その現象はこれからの外来語の使用が、ただの名詞としてそのまま受け入れるに止まらず、造語にも関与していくことを表わす徴しでもあるだろう。

本研究は語種の観点から、以前に行われた調査(野村(1984)、박형익(2005))の成果も取り入れて新語と語彙全般との語種構成の変化を探った点、今までの対照研究とは違い主に、外来語に注目して対照を行っている点、そして日本語と韓国語の新語の対照研究としてはおおよそ最初の研究であるという点などの面で意義があると考える。しかし、今回は新語における語種を中心に語種構成の変動や語種の組み合わせを分析しているので、ただ造語成分としての位置として構造を見ているだけで新語一つ一つがどのようにできていてどのような結合構造を見せているのかに関しては分析していない。また、本研究では主に新語における外来語の位置と特徴を探ることに焦点を合わせたが、そのためにも他の語種の特徴を綿密に探る必要がある。これらについては今後の課題としたい。

また、今回は2001年から2010年の間の新語をデータとして主に新語の語種構成と混種語の外来要素について述べた。10年間というのは長い時間のようではあるが、言語の変化について言うには短すぎるので、どちらかというとやや共時的な観点から述べた。今後は毎年の新語を集めて外来語の新語、混種語としての外来要素に対する観察を行い、外来語の推移や定着などの通時的な観点の研究を行っていきたい。そこから外来語の推移や定着そして造語成分としての働きについても探ってみたい。さらに、新語は社会とも密接に関係しているため、社会言語学的な観点からの外来語の使用様相についての分析や考察も必要であると考える。

備考　論文の要旨はＡ４判用紙を使用し，4,000字以内とする。ただし，英文の場合は1,500語以内とする。

Remark: The summary of the dissertation should be written on A4-size pages and should not exceed 4,000 Japanese characters. When written in English, it should not exceed 1,500 words.